

【一般口演5】 第15席 『難経』諸注における奇経八脈の病證について

宮城 伊藤 真佐子

奇経とは、任脈・督脈・衝脈・帶脈・陽維脈・陰維脈・陽蹻脈・陰蹻脈の八種を指し、経絡系統の一部を形成する。奇経についての記載は、早くは『黄帝内経』に散見するものの、“奇経”という言葉自体は見えず、『難経』に至って初めて“奇経八脈”として総括される。その後、『内経』や『難経』の諸注釈によって発展をみる。

しかし『聖濟総録』巻192・鍼灸門・奇経八脈にある解釈をみれば「脈有奇常、十二経者常脈也。奇経八脈即不拘於常。故謂之奇経。蓋以人之気血常於十二経脈。其諸経満溢。即流入奇経也」とあるように、奇経八脈は通常はあくまで正経の予備的、補助的な役割を担うものであると認識されていた。そのため、これまで精査されてきたとは言い難いのである。

発表者は昨年、本学会において、『難経』二十八難についての諸注釈の比較を行い、奇経八脈の流注について考察した。そこには[『内経』に始まり、時代を追ってよりこまやかな内容を備えた奇経八脈が成立してゆく様子が看取された。

本発表では、『難経』二十九難の諸注釈を中心にして、それぞれの脈の病證について考察するものである。方法は前回と同様、諸注釈の比較検討による。病證を考慮することによって、奇経の発展過程について、より詳細な追求を行うものである。